

奴隸騎士は再び魔剣を握る

青い灰

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

裏切られ、墮とされた奴隷騎士の救われる話。

目次

序章	く終わりと始まりの国でく	
終わりの始まり		1
奴隸オークション		8
お姫様は機嫌が良い		16
違和感		20
旅の始まり		25
閑話 在りし日の夢		30
1章 雨上がりの蒼天		
止まぬ雨の村		41
魔物の襲撃		46

序章　く終わりと始まりの国でく
終わりの始まり

「何故だ!!私は貴方に誓った筈だ!!」

貴方は私を認めてくれた筈だ!!

だからこそ私はこの剣を捧げた!!」

私の叫びが玉座の間に響き渡る。

拘束された両腕は魔法によって封じられ、

腰の剣を抜くことが出来ない。

目前にいる今まで15年の人生を全て捧げた

姫は黙って俯いているだけ。

髪に隠れてその表情は見えない。

数人の部下に床に身体を押し付けられる。

それでも顔を上げ、叫び続ける。

「初めから裏切る算段だったのか!!?」

使い捨ての手駒だと貴方は言うのか!!?

貴方の『信頼』の言葉は嘘だったのか!!?

ふざけるな!!私は必死に剣を捧げた!!

貴方の敵を幾度斬ったか、最早覚えていない!!

貴方の為にどれだけこの手を汚したか!!

貴方の為にどれだけこの剣を血で濡らしたか!!

貴方は……いや、貴様は………ツ!!!」

喉が裂けようと、血反吐を吐こうと、

ただ『何故』と『憤怒』を叫び続ける。

無限に怒りが沸き上がる。

全身から魔力を放ち、
身体を押さえつけていた兵たちを吹き飛ばす。
同時に左手を床につき、
右手で剣を抜き放って魔力を込め、
黒い雷を纏わせた剣を大きく右に引き絞る。

「アアアアアアア!!」

半狂乱となって剣を怒りのままに振り抜く
——その瞬間だった。

「そこまでだ」

黒雷とは対称的な純白の光が黒雷を遮った。
黒と白が弾け、光はすぐに晴れる。
斬り潰そうとした姫の真横に、
純白の鎧を纏った女騎士が立っていた。

「ツツ……ファイーネエエ!!」

お前も……お前も俺を裏切るのか!!!」

怒りのままに言い放ち、剣先を向ける。
ファイーネ・ヒルド。
同じく姫に人生を捧げた幼馴染み。
本当は分かっている。敵だ。
だが僅かな望みをかけて、俺は問うた。

「ええ、そうです。

それにしても……よく耐えるものです。

そろそろ毒が回る頃だと思えますが」

「な——う、ぐ」

俺を嘲笑うように彼女は断言する。

……そして、毒と、そう言った。

身体から力が抜ける。

意識に霧がかかり、その場に膝をつく。

「自覚したら効いてきましたか？」

フィーネが言う。

だが、即座に俺は自分の足に剣を突き立てる。

黒雷で更に痛みは増すが、

良い目覚ましにはなる。

「!？」

「舐める、な……!!」

血が噴き出す。

意識は少しだが戻った。

剣を引き抜いて血を払い、立ち上がると

フィーネが剣を振って姫の前に立ち塞がる。

「驚きました、まさかまだ立ち上がるとは」

「!!」

無事な右足で真っ直ぐに跳躍、

両手で剣を振り上げながら魔力を解放し

再び黒雷を纏わせる。

対するフィーネも剣に光を纏わせた。

「碎け散れ!!!」

「!」

最大火力まで引き上げた剣を振り下ろす。
同時に白騎士も光の剣でそれを相殺。
雷と光は消え去り、
剣と剣の鏝迫り合いになる。
だが。

「姫、今です」

「な——ッ!？」

「……………セト」

名を呼ばれ、

背後に回り込まれていたことに気付く。

当然、一国の姫に騎士を打ち倒すような力はない。

だが彼女は魔法について学んでいる。

ここで鏝迫り合いをやめれば

フイーネに斬られることは分かっている。

背後へ向き直ることは出来ない。

後ろ蹴りも踏ん張っているため封じられている。

そして、彼女の小さな手が後頭部に触れた。

「現に在りし魂よ 今一時 夢に沈み給え」

昏睡魔法の詠唱——!

まともに喰らえば抵抗を無視して発動し

2〜3日は目覚めなくなる魔法。

密着していないと発動しないが、この状態では……

紫の魔法陣の光が周囲を照らす。

そして、意識と力を魔法に刈り取られる。

剣を落とし、身体から力が抜けて

バランスを崩してふらつき、横に倒れる。

「く……………こん、な……………」

……………許さ、んぞ……………必ず……………かなら、ず……………！」

肺から絞り出す。

それは呪詛。それは憤怒。

今の自分が持つ感情を吐き出す。

そして、意識が完全に消失する。

これが——5年前の話だ。

「……………しかし、お前みてえな
グッズを買うような奴はいるのかねえ？
まあいい、こちらら仕事だしな……
売れなくとも最期まで面倒みてやるよ」

「はッ」

乾いた笑いを漏らす。

笑ったのは何年振りだろうか。

いや、声を出したのも、前は何時だったろうか。

そして、ガラガラと音を立てて

牢を乗せた台車は進んでいく。

——そして、眼を開ける。

拡声器の魔具を持った男が待ち詫びたように言う。

「それでは皆様お待ちかね!!」

5年前の国の2人の騎士のその片割れ、

姫に反逆し国を揺るがした黒の騎士!!

その汚名を——セト・モルドレット!!

我等が姫様と白騎士様は彼を死刑にせず、

なんと奴隷へとその階級を落としました……

そして今!!

何も飲まず、何も食わず、彼は生き延びた!!

そして奴隷として売られることになりました!

こんな騎士を買うような物好きはいるのか!!

もしも買ったなら殺されるかもなア!!」

歓声、罵倒、怒号。

様々な声が飛んでくる。

俺はゆっくりと顔を上げた。

そこは眩しいステージの上。

俺を入れた牢が台車から降ろされる。

「額は最低額の銅貨1枚からです!!」

——オークション、開始イ!!!」

俺は、奴隷になっていた。

奴隷オークション

オークションが始まって1分ほど。

どうやら物好きが多いらしく、

果物すら買えない最低額はグングン上がっていく。

「52番、10銀貨！」

「はあい10銀貨きました!!」

いいねえ命知らずが多いじゃないの!!」

「11番、いや12だ！」

「グングン上がるうっ!!」

そして安い武器なら買える値段だ!!

そんな注ぎ込んで大丈夫かよ!!」

「40枚っ!!」

「いきなり上がったア!!」

40って正気かよネーサン!!」

「124番、倍だ80!!」

「やべーぞおいい!!」

こりやすげえ、流石は元最強騎士だア!!」

……………どうやら早く終わる気配はない。

こちらはさっさと済ませてもらい、

この狭い牢から出してもらいたいのだが。

牢から出されたとして黒雷の宝剣は残っていない。

多少は魔法と素手でも戦えるが、

騎士の誇りを奪われては……………

「いや、もう俺は……騎士ではなかったな」

ボソリと呟く。今は奴隷だ。

こうしてかつての誇りを汚され続けるのだろう。

5年。

その歳月は俺から気力を奪い、精神を磨り減らしていった。

死んだ方がマシだと、

出されたモノを食わず飲まずを続けた。

だが……生き延びてしまった。

復讐も願ったが……

まだ、彼女らの笑顔が脳裏にチラつく。

冷静になった。

いや、冷静になってしまった。

こうなってしまうては、斬れはしない。

たとえ正面切つて会ったとしても、斬れない。

洗脳だ。

洗脳の筈だ。

………楽しかった思い出も。

辛かった剣の腕を磨いた日々も。

優しかった2人の友人も。

全て嘘で塗り固めただけの虚構だと言うのに。

それでも俺は、何処かであの2人を信じている。

———違うか。信じたいだけだ。

ただの希望的欲求だ。
分かってる。
分かっていても……………

そんな感傷に浸っていた俺の意識を、
静かで高い声が掬い上げた。

「――聖金貨、100枚」

その言葉は小さかった。
だがよく通るその声は確かに、そう言った。
そして……………城すら立つようなその金額に、
オークション会場にいた俺を含めた全員が、
まるで吹雪にでも晒されたかのように凍りつく。
俺は思わず、いや、全員が、
その声の主へと眼を向ける。

白銀の長髪に紅蓮の色をした双眸。
その顔立ちは整ってはいるが、
高貴な身分とは感じさせない雰囲気。
纏う服も黒いフード付きのローブである。
とても、そんな額を出せるような

王族や貴族には見えない若い少女だった。
年齢は、俺より少し下なくらいか。

沈黙が、続く。

それは数秒……いや、2分にも及ぶほどのもの。
やっと口を開いたのは
オークションを仕切っていたオーナーだった。

「い、今………なんと?」

額を、お間違えになつたのでは………?」

「聖金貨100枚。

210番目の私はそう言ったわ。

どうかしら、まだ払える者はいる?」

その微笑みは怖気すら感じさせるものだ。

エルフでもドワーフでも獣人でもない、

人間離れた笑みだった。

それは幾度も死線を潜つた俺も

ビリビリと肌が震えるほどのもの。

まるで世界最強の生物……

神魔種の威圧にも似たものだった。

「………いないみたいだけど、オーナー?」

「ひ、ひゃい!」?

いませんね!?確認です、いませんね!?

せ、聖金貨100枚でお買い上げになります!!

210番様は会場裏にお越しく下さい!!」

呆然とする来客と俺。

そのまま終わりを告げるオークション。
慌ただしく、

俺は牢の中に入れられたまま
会場裏へと連れていかれたのだった。

「お、おまたせしました……………では失礼しまあす！」

「ふふ、初めまして、ね。」

国を揺るがした黒の騎士……………セト・モルドレッド」

牢から出され、会場の裏の森で

俺は枷を付けられたまま、彼女と顔を合わせる。

見た目は若いが、かなりの美貌の少女だ。

白銀の髪を揺らして、彼女は微笑む。

オーナーは彼女に怯え、

金だけ受け取りすぐに逃げ去って行った。

しつかり金は受けとる所は商人根性だろうか。

「物好きだな、君は」

「自分でも理解してるわ。」

ふふ、失礼な発言をして拷問される、

なんて騎士様は考えないのかしら？」

「その時は自害するまでだ」

「あらあら、それは困るわね。」

折角大金を叩いたのだし、私にとって死んでもらうのは困るわ」

クスクスと笑いながら彼女は言う。

そして俺の胸にその手を当てた。

その行動に俺は警戒する。

「動かないで……………」

「……………」

「ふふ、良い子ね……………」

甘い香りが漂ってくる。

動くことは出来ない。

枷もあるが、奴隷は主に自動で

命令を必ず受ける契約を交わさせられる。

——だが、これはおそらく。

「魅了魔法か。詠唱破棄とは恐れいったな」

「あら、気付かれちゃった」

彼女は可憐な笑みを艶かしいものへと変える。

それは彼女の美貌を際立て、

飲み込み、取り入ろうとする甘い誘惑だ。

並みの男なら簡単に誑かされるだろう。

並みの男なら、だが。

「それに効かないなんて、流石は騎士様。

……………そ・れ・と・も——」

一拍ずつ置いて、彼女は言う。

その顔は——昔の白騎士と同じ、

愚者を嘲笑う顔で、俺の頬に手を這わせ、言う。

「忘れられないヒト……いるのかしら？」

思わず沈黙してしまう。

そして眼を逸らしてしまった。

ニヤリと笑う彼女はそれを見抜き、その這わせる手で唇を塞ぐ。

「フフツ………なあって、ね。」

冗談よ……貴方からすれば違うかもだけど」

そのやり取りで分かったことがある。

昔、城から出て城下を見て回った時に娼館の女に声をかけられたことがある。

その時と同じ感覚だ。

それは俺を無意識に苦い顔へと変えて、俺は残念さを滲ませて口を開いた。

「俺が一番苦手なタイプだな、君は」

「それは嬉しいわ。」

私も紳士なヒトは好きよ？」

小悪魔的に微笑む彼女。

俺はこれからの事を考えると溜め息が出た。

「私はルシア・ヴァン・エーデルハイド。」

よろしくね、私の騎士様」

既に騎士の誇りは奴隸という立場に汚された。
そして今度はこの少女に、
人として弄ばれ続けることになるという
残念な観測だった。

お姫様は機嫌が良い

「それで、新しい主の命は？」

俺を騎士と呼ぶのなら使命が必要だ」

「堅苦しいのね、騎士らしいけど」

自己紹介を終え、

俺はルシアと名乗った少女に聞く。

彼女はフードを眼が隠れるほど目深に被り、
ちやんと前を向いているのか分からない。

「使命は……そうね、私も守って。

騎士なら簡単なことよね？」

「承知した。我が名に誓って」

「ふふ、ありがと。

それじゃ少し寄ってくれないかしら？

認識阻害の魔法の心得はあるわ」

言われた通り、彼女に寄る。

彼女は人差し指を俺の顔に向けて眼を閉じ

詠唱を始めた。

……しかし、認識阻害の魔法などあったのか。

5年のうちに魔法も進んだらしい。

「〴〵知らず 見えず 解せず

認識揺らすは我が魔力

彼の者の印を現世から絶たん〴〵」

「……………」

詠唱が不吉なのだが……………
それにしても、魅了魔法は中級魔法と呼ばれる
詠唱破棄するのは困難な魔法だ。
それを易々と、触媒も無しに破棄できるような
彼女が詠唱を必要とする魔法か。
認識阻害の魔法は中々に高位の魔法であるらしい。
そして白い魔法陣が頭上に広がり、
頭から足へと魔法陣が身体を透過する。

「よし、上手く行ったわね。

これで貴方の姿を見た者しか
素性の認識が出来なくなつたわ」

「さぞや高位の魔法師なのだろう。

しかし認識阻害の魔法、か……………知らなかったな」
「そうでしょうね。

だってこの魔法、人間には伝わってないもの」

その言葉に少し驚く。

そして……………どこか、納得した自分がいる。

ここまで魔法に長けた種族は
人間でもそういるまい。

そう思うと、合点がいった。

「……………なるほど、魔族か」

「正解よ、魔族は嫌い？」

「いや、別に。」

彼らにも彼らなりの考えがあるのだろう」

「東西南北5つの国があるこのレムリア大陸には
幾つもの種族が存在している。
人間、エルフ、ドワーフなど。」

古くから存在している種族を『原初種族』と言い、その1つである『魔族』は神話の時代からこの世界に存在するとされる代表的な原初種族だ。人間は数々の種族と関わりを持っており、文化交流なども行われていたが、魔族は他種族との関わりを持っていない。人間も何度か国交を取ろうとしていたが、冷たくあしらわれるだけだった。特産物なんかの土産くらいは持たされたようだが、俺の答えに彼女は嬉しそうに笑った。

「なら良かったわ、

寝首を搔かれては堪らないもの」

「既に誓いは立てた。

主が誰であろうと、今度は最期まで誓いは守る」

「……………今度は、ね」

彼女は俺の言葉を復唱し、

その顔を少し俯かせる。

と、思えばバツと顔を上げた。

「さて、騎士には剣が必要よね。

流石に宝剣は無いけど、

武器屋で買えるもので良いかしら?」

「無いよりはマシだ。頼めるか?」

「ええ、お金なら沢山あるの。

聖金貨は流石にカラッポだけどね」

その言葉はまだ金貨や銀貨はあると言うこと。

俺は皮肉交じりに息を吐いて言う。

「一体どこのお姫様なんだろうな」

「……！ ふふっ、お姫様、お姫様ね……」

ええ、本当に……どこのお姫様なんでしょうね？」

どうやらそのセリフは好評だったようだ。

彼女は嬉しそうにスキップを始め、

町の方へと進み始める。

そしてこちらを振り向き、言った。

「行きましょ、セト。」

「私の騎士様の剣を買わなきゃね」

「——はいよ、お姫様」

それは、人生を捧げた彼女と重なって見えた。

そして何処か懐かしい感覚で、

俺は彼女を追って駆け出した。

違和感

俺はルシアと共に町へ出る。
どうやら5年の間で少し賑やかになったようで、
5年前は希だった別種族たちの姿を
所々で見られるようになっていた。
大きな噴水広場で
俺はそれを眺めていた。

「賑やかだな」

「ええ、件の事件から5年。

黒と白の最強騎士の片割れが消えたから
他の種族に攻められないように、って
人間のお姫様が頑張ったらしいわよ？」

「へえ、ご苦労なことだな」

「ええ、今では国交反勢力も無くなったらしいわ。
そのお陰もあって国同士の仲は良好。

で、今に至る……ってワケよ。
さて、そろそろ感傷に浸るのは
終わりにしてもらっていいかしら？」

「悪いな、町の様子を見たくて我儘を言って」
「構わないわ。」

明日は国を出るから、楽しんでおいて」

これからの計画を聞くと、
国で旅の準備を整えてからは魔族領に行くらしい。
魔族領は大陸の中央にあるここから
ずっと西に行くことになる。

まずは武器。

国領内とはいえ、町から出れば

「そこからは死の危険すらある魔物が出没する。騎士として剣の一本は欲しい。というわけで俺たちは武器屋へ向かう。」

「長剣ならなんでも良いのかしら?」

「ああ。一番手に馴染むのは

宝剣だったが無いものは仕方ない」

「流石に黒雷の魔剣はね……………」

まあそのうち探してあげるわ、

貴方以外に振るえない剣なんでしょう?」

「助かる。無理に他人が握ると最悪死ぬからな」

人が無駄に死ぬのがあの剣の悪い所だ。

俺の魔剣や白騎士の聖剣は主を選ぶと言う。

事実、あの魔剣を盗もうとした輩は黒雷に

焼かれて昏睡に陥ったと聞いたが……………

今は目覚めたのだろうか。

「確か白騎士の剣も聖剣よね」

「ああ、白騎士が持っていた聖剣か……………懐かしいな」

そんなことを話しながら武器屋へと向かう。

しかし、やはり認識障害は凄い。

道行く人々はこちらを気にする様子もなく、

明らかに怪しい黒フードのルシアも

気付かずに素通りされている。

それに俺の赤髪は大陸では珍しく、

かなり眼を引くようなので助かっている。

「……………ねえ、本当にそれで良いの?」

「斬れば十分だ。」

「魔力を流せばなお良し」

俺が選んだのはただの無銘の長剣だった。

店主に鞆まで貰えた。

それを武器屋の訓練用の中庭で

軽く振り、久しぶりの感触を楽しむ。

だがルシアはどこか心配そうだ。

「まだ良いのはあると思うわよ?」

「いや、これで良い。」

軽く魔力を流せば竜鱗くらいなら斬れる」

「まあセトがそう言うなら構わないけど……………」

言った通り、軽く魔力を流してみる。

しかし……………久しぶりに名前呼びをされた。

牢にいるときは番号だったせいか

少し新鮮な感じすらする。

そのまま魔力を剣に流していくと、

剣が淡く青い光を放つ。

そのままの状態を維持しながら剣を上段、

顔の横に持ち上げ、その切っ先を前へ向ける。

「ふ——っ!」

呼吸と共に右上からの袈裟、
即座に右足を踏み込んで
左から2連目の水平斬りを放つ。
同時に剣が纏っていた光が横一文字の
飛ぶ斬撃となって飛翔、
数m離れていたのへ直撃して爆発的を塵にする。

「ん、少し振るのが遅くなったか。
毎日1000回は振って……

ざつと1年は振り続ければ昔の速度には戻るかな」
「私、どうツツコめばいいの？」

一般的に飛ぶ斬撃（ただの魔力飛ばし）は
認知度が低かったため不意打ちとしては有効だが、
この剣では連続して撃てないし
威力も最低レベル、そのうち壊れるだろう。
そもそも俺自身の魔力保有量が
多くはないから燃費は良いが、
やはりあの魔剣に頼りきりだったのが悪かったか。

「だが良かった、誤差の範囲内か」

「……………え、セト。貴方、誤差って言ったの？」

「？ そうだが……………どうかしたか？」

眼を丸くした彼女が聞いてくる。

なにか失敗しただろうか。

それとも言葉がおかしかっただろうか？

聞き返すと彼女は慌てたように取り繕って笑う。

「い、いや、なんでも、ないわよ？…うん」

「？」

取り敢えず、こうして俺は5年振りに
再び剣を握ることが出来たのだった。

旅の始まり

「準備はこんなものかしら。」

それじゃ、後は町の外で馬車に乗るだけね」

その言葉に頷く。

剣を買って一晩経った翌日。

俺は今日、この国を出ることになる。

早朝の街路で買い物を終え、

なんとなく、町の中央に聳え立つ城を見上げた。

今あそこには、姫と白騎士がいるのだろう。

何をしているのだろうか。

「……………気になる？」

視界の端でフードをしたルシアが

顔を出して聞いてくる。

……………確かに気にはなる……………が、それまでだ。

何をしているのか、としか思わない。

昔と変わらない日々を過ごしているのか。

今は風の刻（朝6時頃）だ。

もし、今から鍛錬所に行けば白騎士が……………

「おーい、聞こえた？」

「……………悪い、聞こえた。」

気にはなるが、そこまでさ」

「ふーん……………復讐とか考えないワケ？」

……………復讐、か。

確かに牢を出たからには妥当なことだろう。
だが、そんなことをする必要性は感じられない。
故に俺は首を横に振った。

「……………いや、怒りは沸いてこない。

仕返しをしたとして、

楽しかった昔に戻ることはないしな。

それに、無意味だし、無謀だ」

「……………」

「俺の使命は君を守ることだ。

もし白騎士に戦いを挑んだとして、

おそらく……………いや、確実に俺は負けるからな」

そう言うとき彼女は眼を細める。

そして一瞬、躊躇う……………もしくは考えるように

視線を泳がせ、口を開く。

「負けるから、復讐しないのね?」

「そうだな。

俺は奴隷、主の使命に従わなければならない。

失った騎士の誇りも、今は君に捧げている」

「あっ今キュンとした。

それいいわね」

「真顔で言われてもな……………」

冗談なのか本気なのか、

主の言葉に俺も頬を緩める。

彼女も同じようにクスクスと笑う。

だが、その笑みにはどこか物悲しげな感じがある。

それを聞こうと口を開くが、

彼女が先に問うてくる。

「…………セト、国を出るのだから最後に聞いわね。姫と白騎士フィーネに、会う気はないのね？」

「ない。
捨てられた玩具は塵箱の中で良い。
玩具の新しい持主は現れたしな」

自虐的に言う。
牢で、新たな持主の元で、考え直した。
俺はこれで良い。
余計な思考は捨てて、命令に従うだけで。

「彼女等に…いや、国に俺が不要ならば、俺は新たな持主に拾われるのが最善だ。改めて…………この命、使い潰してくれ」

その言葉に彼女は溜め息をつく。
そして嬉しそうな…………どこか、悲しそうな
笑みを見せて、こう言った。

「安心なさい。
私、綺麗好きだから磨き直してあげる。
その信念も、剣も…………人としての在り方もね」

彼女は俺の手を取る。
そして彼女は走り出し、
俺の手を城下を囲む大壁の門へと引く。

「さあ、行きましょう。
きっと、とても楽しい旅になるから」

その言葉が脳を揺さぶる。
身体の芯が熱い。
その笑みが、失った欠片を取り戻してくれた。

「……………ああ」

頷き、共に走り出す。

それを、金髪の女は見ていた。

「……………ふふっ」

女は感情の読めない笑みを漏らし、
腰の純白の剣、その柄に触れる。
剣は主に答えるように燐光を纏い、
カタカタと揺れ始めた。

「良かった……………これで——」

口を吊り上げ笑みを浮かべた白の聖剣を携えた女は
外套を翻してその場を後にした。

閑話 在りし日の夢

暗雲の空の下。

戦況は劣勢。

後に最強と謳われる2人の騎士の片割れは単身、
国を背にした大草原で

世界を滅ぼすという665匹目の「災害」

古王竜クラウディウスとの死闘に臨んでいた。

俺は雷の魔剣を振るい、竜の首へと突き立てる。
黒い鱗を突き破り、肉を裂きながら
剣は奥深くへと進んでいく。

「『黒雷・放電』!!」

叫び、魔力を解放する。

黒い雷が周囲に迸り、突き刺した首を焼き潰す。
それに竜は大きく怯むが………

「ぐ、ぎ、があ……ッ!!」

瞬きの間、その言葉通り一瞬で
即座に傷口を再生した竜は

俺を剣ごと振り払い、腹に食らいつく。
鋸のような返しをついた牙による鋭い痛み、
更にその痛みに怯んだ俺を

「あ」

一度牙を引き抜かれる。
返しが肉を抉る。

そして——竜は更に力を込め食いつく。
その形容しがたい、最早声すら出ない激痛。
全身の力が抜ける。
更に竜は己の牙の形状を知っている。
そのギザついた牙で、
獲物の身体を磨り潰すように顎を動かす。

——死ぬ。

そう、確かな感覚があったその時だった。
凜と高く響く、声が聞こえた。

「セトおおおおおお!!!」

光が周囲を白で染め上げる。
そして、一際眩しい極太の閃光が竜を貫いた。
首が落ち、俺は解放され自由落下を開始する。
地面に落ちる寸前、抱き止められる。
視線を動かすとそこにいたのは、
金髪をなびかせる白い鎧を纏う騎士。
その顔は涙でグシャグシャになっている。

白騎士フィーネだ。
彼女は俺を地面に寝かせ、
淡い光を放つ両手を血が流れ出る身体に当てる。
回復魔法だ。

「セト、セト……！」

死なないで、お願い……！！」

その必死な形相に俺は腹に力を込めて
激痛を堪えながら声を絞り出す。
痛みはかなりの速度で引いていき、
身体が楽になってくる。

「……馬鹿……遅え、よ………」

「……っ！！」

「ごめん、ごめん……っ！」

そして、視界の端。
再生を終えた黒竜がその翼爪で
大地を抉りながらこちらへと迫って来る。
俺は動ける程度までは回復し
立ち上がって剣を取る。

「フィーネ、来るぞー！」

「うんー！」

その爪を同時に剣で受け止める。
火花が散り俺とフィーネを吹き飛ばすが、
なんとか耐えて着地する。
1人だと押し負けていたが、
やはり2人だと楽でいい。

「フィーネ、涙拭け。

俺はもう大丈夫だ」

「分かった……いえ、分かりました。

ですが、無茶だけはしないでください」

いつもの面倒な敬語モードに入るフィーネ。

2人の時や姫と3人の時は

普通の口調なのだが、公の場や戦場では敬語だ。

堅苦しくて俺はあまり好きではない。

俺は彼女に奴の特性を教える。

普通に闘って倒せるような相手ではない。

相手は世界を滅ぼせる力を持つ「災害」。

それも665匹目の大物だ。

「奴の特性は再生能力、ゴリ押ししかなくてな。

秘策……ってほどでもないが、

倒す手立てがある。時間稼ぎを頼めるか？」

「ええ、貴方が1人で戦ったのです。

それだけの働きはさせてもらいましょう」

彼女は剣を構える。

その闘気に剣が呼应し、剣が光を纏う。

そして竜へと駆け出していく。

俺は彼女に時間稼ぎを任せた秘策。

黒竜はおそらく一欠片の鱗でも残れば

即座に再生する不死とも思える

再生能力を誇る化物。

ならば、塵1つ残さずに消し飛ばすまで、だ。

俺は剣を胸の前に掲げる。

黒雷が刀身を這い、ビリビリと音を鳴らす。

剣の全ての魔力を解放する。

「魔剣・真名解錠。

我が敵に裁きを。我が敵に死を。

我が信じた者を、仲間を、民を、国を。

我が手に在りし雷の魔剣、

その力を今、我が全てを守るために振るおう」

魔力を流しながら詠唱する。

竜が咆哮し、その口から炎を吐きだす。

炎は大地を抉り喰らいながら

こちらを呑み込もうと迫り来る。

だがその炎を純白の光が遮り、

その白を引くのは宝剣を持つ白い騎士。

竜が魔法を発動する。

その口を中心に巨大な5重の魔法陣が展開。

魔法陣が輝き、100を越える

黒い閃光が放たれる。

「灼け、大地を

断て、天空を

割れ、絶海を

滅せ、我が前に立つ生命を」

白騎士は宝剣の魔力を解放し速度を

最速である音速にまで引き上げ、

追尾する閃光を回避しながら

空へと跳躍する。

そして剣を掲げると純白の光が収束、

全ての黒い閃光を抹消させる。

だが黒竜がその背後へ迫り、

その翼爪を白の鎧へと叩きつける。
抵抗できずに白い騎士は
大地へと叩きつけられ土煙が上がる。
更に黒竜は追撃しようと急降下するが、
土煙を引き裂いて数本の白い閃光が
黒竜の身体を貫いていく。

「我が魔劍をその身を以て受け取れ」

黒雷が劍に収束し、帯電。
雷が空へと昇り、空を覆っている暗雲を貫く。
その黒が世界から光を奪っていき、
世界は灰色に染まる。
竜は今更こちらに気付いたのか、
それを止めようとこちらへ
これまででない凄まじい速度で迫ってくる。
だが、奴は間違えた。
逃走本能に身を任せるべきだった。
劍を大きく振り上げ、左足を後ろへ下げる。
天を突く黒劍はその雷の強さを更に増していく。

「」

魔劍の真名を口に出す。
その瞬間、雷は更に膨れ上がり、
一瞬でその魔劍へと凝縮する。
そして、迫る竜へと魔劍を振り下ろした。

雷が爆発し、大地を削りながら
黒い光柱が空へと昇っていく。

それは竜を容易く呑み込み、
振り下ろしたその一帯を
抉り、削り、呑み込んでいく。

黒い光柱が立ち昇り、雷が迸る眼前。

俺は剣を鞘に納める。

すると背後から突然重みを感じ、

俺はそのまま前に顔から倒れてしまう。

「いってえ!？」

「やったあああ!倒した、倒したよ!!」

私たち、世界、救ったんだよ!!」

「分かった分かった……お疲れ、フィーネ」

馬乗りになるフィーネを宥めながら、

俺は未だ世界を救った実感の無さに

嘆息するのだった。

晴れ渡った空の下。

玉座の間に、俺たちはいた。

「セト・モルドレッド、フィーネ・ヒルド。

国を代表して姫、ルイス・エルグランドが

あなたたち2人に、王国騎士の称号を与えます。

魔剣と聖剣はお譲りしましょう」

姫の前に膝をつき、

俺とフィーネは魔剣と聖剣をそれぞれ、
そして王国騎士の称号を受け取る。

「あなたたちと今まで生を共にしたことを、
私は誇りに思います。

まだまだ未熟な姫ですが、これからも
騎士として……良き友として、よろしくね」

敬語が取れ、最後の部分を俺たち2人だけに
聞こえるようにニコリと笑って彼女は言う。
それに俺たちも笑い返す。

ある日のことだ。

俺は夜中の城の見回りをしており、
姫の部屋を通り過ぎた時だった。

『……の……す蛇……!?!』

真夜中の筈の姫の部屋で、
フィーネの声が聞こえた。

その声からは彼女の驚愕が伺える。
俺は何となく立ち止まり、それを聞く。

『そ………では………』

『……まだ…… わけ。
必ずしも……から』

そこまで聞いた所で我にかえる。

我ながら盗み聞きとは……

内密な話を聞くのは良くない。

彼女らも年頃だ、女同士で話でもあるのだろう。

介入するのは……というか盗み聞きは失礼にあたる。

だが……蛇、か。

その言葉が妙に頭に残っている。

だが、霧がかかったかのように記憶は

思い出すことを拒否している。

(……夜も遅い。見回りも交代だし寝るとしよう)

俺はそう思い直し、その場を後にした。

「……………」

意識がガラガラと
地面を走る台車の音に引き上げられる。
意識が覚醒し、眼を開ける。
繋がれた腕と脚の枷の鎖が音を鳴らした。

(随分と、懐かしい夢を見たな……………)

もうあれから5年……

いや、古王竜討伐はもう7年も前になる。
ただの昔の夢にしては妙に現実味があった。

「……………」

身体の傷が疼く。
古王竜との戦いで食いつかれた時の傷だ。
フィーネの力で見た目だけは完全に治ったが、
未だに痛みが走る。

「……………蛇……………」

この痛みがああ夢の原因だとすると、
何故『蛇』が夢に出てきたのだろうか。
聞き覚えのある単語ではない。
思い浮かぶのも魔物くらいだが……
何故か、そのことではないような感じがする。
上手く言い表せないが、
嫌悪感すら感じる単語なのだ。

「……………いや、今は」

歓声が聞こえてくる。
どうやらオークションの時間のようにだ。

『蛇』は、胎動を始めていた。

——
復活終焉の刻は、近いうちに訪れる。

1章 雨上がりの蒼天 止まぬ雨の村

馬車で町を出て数時間。

俺がやると馬が暴れたのでルシアに御者を任せ、荷台の上で魔物が来ないか観察していた俺はそこだけ局所的に雨が降っている場所を見つける。

「気付いた？」

あの地域だけ雨が止まないらしいわよ」

「へえ、確かあの辺は……小さな村があったな」

確か、ウォーレ村という名だったはずだ。

しかし5年前は雨が止まない、など

聞いたことがなかったが……

実際に昔、あの地域に魔物退治に行った時は晴れていたと思うが。

「行ってみる？」

5年間の情報収集も必要でしょうし、

あの町以外じゃ貴方の顔は

あまり知られていないわよ？」

「そうなのか」

「ええ、貴方って無愛想なもの。

外の村の人たちが覚えるのは大抵が白騎士。

話せば普通に喋れるのにね」

その言葉が正しいならば俺は都合が良い。

それに彼女の言う通り、情報が少しでも必要だ。ルシアも魔族故に分からないこともあるだろう。それに、魔物退治も5年以上前だ。

「今となつては都合が良いな。」

——では、頼めるか？」

「良いわよ、別に急いでるワケでもないし。」

「のんびり寄り道でもしながら行きましょう」

奴隷であることを考えて一応は主である彼女に聞いておく。

「そういえば奴隷は敬語を使うべきなのだろうか。」

「ルシア」

「どしたの？」

「奴隷として俺は敬語を使うべきだろうか。」

「やはり主従の関係は斯くあるべきだ」

「別にいらないわ。」

「しつくり来ないだろうし、」

「貴方って敬語は苦手でしょう？」

「ああ、ならばこのままで良いか」

「こうして、俺たちはウォーレの村へ向かう。」

——小さな影が、それを追って動く。

「激しくはないけど……」

「これはずっと続くのは気が滅入るわね」

数時間後。

俺たちは村の酒場のカウンターにいた。

横で椅子に座って果実水を呷っているルシアはしんどそうに言う。

「外の雨は彼女の言葉通り激しくはないが小雨というほど弱くもない。」

「この雨が3年、か」

「そうだなあ、オレたちも」

森の奥地が怪しくて調べようとするんだが、魔物が現れ始めて難儀してたんだよ」

マスターがグラスを磨きながら言う。

「だが、この村には冒険者ギルドという」

「何でも屋がある筈だ。」

ルシアも同じことを思ったようで、

首を傾げる。

「ここって冒険者ギルドもあるんでしょ、冒険者なら魔物相手に戦えるんじゃないの？」

「……………我々もそう思ったのです。」

そして依頼を出しました。

報酬は村全員が出す、そう依頼書に記載して」

「特に貧しい村ではないようだし

そこまで報酬を弾んだならば依頼を受ける者も多かつたんじゃないか？」

俺の言葉にマスターは目を伏せる。

そして、数秒の沈黙の後、

再び口を開いた。

「ええ、その全員の死体が、

その森の入口で見つかりました」

「……………そうか」

「森の入口って……………魔物が運んで来たってこと？」

そんな知性がある魔物なら

緊急依頼としてギルドに出されるんじゃない？

そうしたら高位の冒険者も来るのに……………」

ルシアの言葉は最もだ。

5年前と変わらなければ、

冒険者ギルドは知性を持つ魔物に対して

“緊急依頼”として高位冒険者のみを受けられる最優先依頼が出される。

緊急依頼ならば手練れの冒険者が来るだろう。

だがマスターはグラスを置き、言う。

「ギルドの緊急討伐依頼の条件を、

お二方は覚えていますでしょうか？」

「……………セト」

「そこまでは俺も分からない。

俺は冒険者じゃないからな」

マスターが置いたグラスに水を注ぐ。

外では止まない雨の音が響いている。

まだ昼故に誰もいない酒場は静かだ。

「知性を持った魔物の出現。

そして“広域での被害の確認”です」

「……………雨で作物が育たなくなるじゃない」

だが、マスターは首を横に振った。

「育つのですよ、作物が」

「え、なんで？」

「分かりません。」

土が泥のようになることも、ないので

「……………水捌けが良い土地、で済むことではないな。

それは明らかに異常事態だろう」

「ええ、ですが実害がないのも事実なのです。

不気味ではありますが、

森に入らなければ問題は無いのですから」

マスターは水を注いだグラスの水を、

土になっている床に流す。

だがその地面は濡れるどころか、

まるで荒野の土のように即座に乾ききったのだった。

魔物の襲撃

傘は無料で借りることが出来るらしく、ありがたく借りて店から出る。しばらく、ルシアと村を歩きながら話していると、彼女は顎に手を当てて考え込むように言う。

「それにしても、この雨……………」

かなり薄くだけど魔力が混ざってるわ。

おそらく人為的なものだと思う」

「天候を変える魔法もあるのか？」

「あるけど……………かなり難しいわよ。」

魔法陣を何重にも村中に張り巡らせて

触媒も必要になってくるし……………」

そもそも術式を組み上げるのが複雑すぎるのよ。

人の頭じゃ処理に耐えきれないわ」

聞いた側だが、俺は魔法の才能は皆無なので聞き流す。白騎士は魔法も剣も得意だったが、そのせいか剣の腕では俺が上だった。魔法も込みの試合は基本相打ちだったが速度で圧倒されると厄介だった。

そんな昔のことを思い出していると、ルシアが何かに気付いたのか立ち止まる。

「どうした」

「この感じ……………もしかしたら土も……………」

雨の魔力で気付かなかったけど、

まさか土地自体を魔法の触媒にしてる……………」

ねえセト、この辺に魔力の元になるような

……………それもかなり強力なものってあったかしら？」

「そんなものは……………いや……………」

「だとしたら森の魔物とやら、まさか——」

その時。

村の入口辺り、背後から聞こえた悲鳴に俺たちは振り返るが、村の人々は傘も差さずにこちらを走り抜けていく。その中にはマスターの姿もあつた。俺は彼の肩を掴むと、一度驚き、慌てた表情で彼は言う。

「何事だ」

「森から魔物が溢れだして来たんだ！」

冒険者たちは出払ってる、

あんたたちも急いで村から逃げろ！」

そう言つて走り去っていくマスター。そしてルシアはこちらを見上げる。

「どうもキナ臭いわね。

行くわよ、まずは魔物を撃退しないと」

「分かった」

俺たちは村人たちとは逆方向に走り出す。

「……………予想以上の大群。

これは一大事ね、でも1人で十分かしら？」

「任せておけ、この程度は肩慣らしだ」

「冗談に聞こえないの、安心感が凄いわね……………」

数多くの魔物たちがこちらに向かつて駆けてくる。だが、何か様子がおかしい。どこか、敵意が感じられないような感覚がある。

「こちらを襲おうとする様子はないが……」

まあいい、悪く思うなよ——！」

「……！」

兎に角、一掃する。

わざわざ的からこちらへ寄ってきてくれるのだ。これを逃さない手はない。剣を抜き、下段に構えて魔力を込める。

こちらに魔物たちが最接近するのを待ち。

「灰になれ」

小さな黒雷を纏った剣を、強く振り上げる。

剣から放たれた黒い雷の魔力が密集する魔物たちを伝い、一度に全ての魔物たちを、欠片も残さず灰へ還す。撃ち漏らしがいなければ、こんなものだろうか。

「終わったが」

「……………魔剣なしで黒雷って撃てるの?」

「魔剣の魔力がまだ身体に残っててな。」

まあ、一匹ずつ斬り伏せるより楽だろう。

剣もまだ3回は持つてくれる筈だ」

「そりやそうだけど……………最強……………ね。」

「これがもう1人いるんだから恐ろしいわ」

「世界は広い。探せば強者はまだまだいるだろう」

「世界って怖いわね……………」

でも確かに、これほどなら……………」

げんなりする彼女の呟いた、これほどなら、という言葉が気になるが、この魔物たち、何が狙いだったのか。逃げるように……というか、完全に何かから逃げているような様子だった。森で何かが起こっているのは確かなようだ。

剣の灰を払い、鞘に納める。

「そうそう、今回は見られてないから良いけど、

黒雷を使うなら出来るだけ人がいない所でね。

流石に勘づかれると弁明のしようがないわ」

「分かった。気をつけよう。

それにしても、やはり森の様子がおかしいな」

「ええ、けど不用意に動く危険ね。

もし私たちが森に入ったとして、

また魔物が出てきたら村の人たちが危険だわ」

「……………」

「ん？どうしたの、急に黙っちゃって」

「いや……言い方が悪いが、

魔族が人間の民を心配するのが少し違和感かな。

偏見を持っている訳じゃないんだ、すまない」

前にも考えたことだが、人間と魔族は今まで仲良くはなかった。昔から人間族と魔族は対立ばかりしていたらしく、戦争もしていたという記録まであった筈だ……。姫が他種族と交易して友好を結ぼうとしていたが、それが上手くいったのだろうか。

ルシアは一度きよとん、として、クスクスと笑い出す。

「ああ、牢にいたから知らないんだったわね。

……魔王が亡くなったから、

今は後継者争いで他国には極力頼りたいのよ。

これからも続けるかは、真の後継者次第ね」

「……………魔王が死んだのか？」

確かに老年だと聞いたことはあるが……………」

「ええ、つい3年前の話よ。」

「こつちに伝わるのも早かったみたいね」

魔王領へ向かっている訳だが、そこで何をするのだろうか。……まあ、ただ主の命には従うだけだ。考えずとも良いか、と頷く。彼女、おそらく何かを隠しているが……………それは、いずれ分かるだろう。答えを急ぐ必要はない。

彼女も言いたくないのか、苦い顔をするのが一瞬見えた。

「さて、今重要なのは森の中よ。」

あれだけの魔物が出てきたんだもの、

おそらく冒険者ギルドの連中が来る筈だわ。

彼等に村を任せましょうか」

「ああ、村の者たちにも魔物を

掃討したことを教えて安心させるとしよう」

「一撃だったけどね……………」